| 神社本庁総合研究所監修・神社新報創刊六十周年記念出版委員会編

『戦後の神社・神道―歴史と課題―』

神社新報社 平成二十二年二月 B5判 四六〇頁 本体三五〇〇円



純・前田孝和の諸氏など、現代の神社界・神道学界にお 康男・阪本是丸・櫻井治男・佐野和史・牟禮仁・茂木貞 り構成されている。各章は、 意識を共有することを目的とする」もので、全十一章よ と同時に、 神道を取り巻く重要な諸事項の課題・問題点を検証する 本書は「神社関係者を対象として、戦後六十年の神社 新報社の小串和夫代表取締役社長の序文にあるように、 総合研 第七章 | 祭祀・ 第二章 | 神社と政治」 (大原康男)、第三章 | 天皇・皇室 e V (阪本是丸)、 本書 全十一章の内容は、 神社新 第一線で活躍しておられる先生方の執筆にかかる。 一究所の監修のもとで刊行されたものである。 は、 現在および将来への展望を提起し、 神社新報創刊六十周年を記念して、 報 第四章 信仰」 (佐野和史)、 「神宮」(牟禮仁)、第五章「神社本 第一章 (櫻井治男)、第八章 | 神職] (茂木 第六章 編集委員を担当された大原 戦後 「神社」(茂木貞純)、 出発点」(大原康男) その問題 神社本庁

生方である。敬称略)。

ず、 分満足させる内容となっている。 の「総括」とも言えるものであり、 とができよう。本書は、言わば神社・神道の戦後六十年 て、これらを合わせれば、 あるいは各章の各節には、 記述自体は平易・簡潔・正確を旨としているが、各章、 間の道程、 本書によって、 神社 そして残された課題は一目瞭然である。 神道の戦後の歩みを知り 戦後の神社・神道が歩んできた六十年 参考文献も多数挙げられてい 問題点をより深く理解するこ 神社関係者のみなら 般の読者も十

介

紹

『伊勢と出雲の神々』

学生社 平成二十二年六月 A5判 二四二頁 本体三二〇〇円



勢神宮・出雲大社の創祀と出雲神話の世界」、「V 歴史」、「Ⅲ と日本文化」、「Ⅱ 伊勢神宮の式年遷宮と出雲大社造営の 四月から八月迄の五回に亘る講演内容が収録されている 演会を開催した内容を編集したものであり、平成二十年 神宮と出雲大社の遷宮に学ぶ」というタイトルで共同公 県の皇學館大学と島根県立古代出雲歴史博物館が「伊勢 おり、 まで全十二本の講演 される六十年毎の造替遷宮が斎行される年に当っている 信仰と出雲信仰」、「あとがき」となっており、IからV た、この年は出雲大社に於いても「平成の大遷宮」と称 構成については、「はじめに」、「I 伊勢・出雲の神々 本書は、 平成二十五年には第六十二回の佳節を迎える。ま 伊勢神宮では二十年毎に式年遷宮が斎行されて 伊勢神宮と出雲大社の遷宮を記念して、三重 伊勢神宮と出雲大社の祭祀と建築」、「Ⅳ (座談会「伊勢・出雲の神々と日本文 ·伊勢 伊

く書かれており、 ている。また、本書は全編に亘り平易な文章で読みやす るかたちで、双方の特色を詳細かつわかりやすく解説し 本書の各章では、伊勢神宮と出雲大社の歴史を対比させ と自負しております」(あとがき)と記されているように までになく、このたびの試みは初めての企画ではないか 方の歴史文化を同時に正面から取り上げた講演会はこれ 比較検討し、双方の歴史について総合的に考察している。 最新の研究成果をもとに、伊勢神宮と出雲大社の特色を 行研究の内容は広範かつ多岐に亘っている。本書では、 政治的な意味でも極めて重要な存在であるが、双方の先 男・渡辺寛 水潔・千家和比古・錦田剛志 井後政晏・上田正昭 本書のなかで、今回企画された講演会について、「双 古代国家の成立過程において、伊勢神宮と出雲大社は (敬称略・五十音順) 江湖にも広く推奨する一冊である。 岡田登・ ・伴五十嗣郎・ の諸氏が担当されている 岡田芳幸・品 川知彦 森田喜. 清

化」一本を含む)が収録されている。また、各章の執筆は

介

紹

講談社

小川原正道著

〈講談社選書メチエ

『近代日本の戦争と宗教』

平成二十二年六月 四六判 二二〇頁 本体一五〇〇円

近代日本の

著者は戊辰戦争から叙述を始める。 戦争を主題にするといっても、 いてほ 5 韻 を太平洋戦争の戦時体制下で耳にし、いまなお、その余 呼びかける。 かで、 のかに焦点が絞られ た戦争のなかで、日本の宗教界がい されていったのか。これが、 味な交響曲にたとえるなら、 再び戦争を主題にする書物を刊行した。著者は私たちに 公新書、 先に 流れはじめていた。その調べはいかに形成され、 のなかにいる。 しいテーマである」(プロローグ)と。 西南戦争の全体像を見事に描いてみせた著者が 平成十九年) 西 南戦争 「昭和期の戦争に対する宗教の協力を不気 その交響曲を導く前奏曲は、 を刊行し、 てい 西 郷隆盛と日本最後 る。 我々はそのフォルテッシモ その 本書を通じて読者諸氏に届 それは明治 新書という小さな器のな かなる反応を示した 実態」 の内戦 国家の体験 究明のため、 したがって、 明治期か 展開 中

第一

章

「戊辰戦争と宗教

権力交代劇の狭間

る。 第四章 納 な側面を知る上で有益な一 のだが) 教会、それを保護する政府 日露戦争が盛り上がるなかで迫害を受けたハリストス正 西南戦争における真宗と神社の動向を対比した第三章や に宗教の影があったことを思い知らされる。 姿勢まで、 的な協力姿勢から、「非戦論」「反戦論」などの消極的 1, の五章構成である。 でー」、 13 詳細な註が 本書は、 宗教と戦争の複雑な関係が顕わにされている。 第五章 | 日露戦争 — 列強との対決と | 団結] の動向を論じた第五章などは、特に印象的であ 「日清戦争―アジアの大国との対戦 第三章 第二章 明治国家のあゆみに伴っていた戦争には、 近代日本の戦争を論ずる際に見逃されがち 「台湾出兵 「西南戦争 本書の価値をさらに高めている。 そこには、 冊であ (これには政府の思惑もあった 日本最後の 初めての海外派兵と軍資献 決して一筋縄ではい ŋ 內戦 選書」には珍 と軍事支援 0) とりわ 中で— 積極 かな け な

明治聖徳記念学会紀要〔復刊第 48 号〕平成 23 年 11 月

326

小川原正道

介 中澤伸弘著

『宮中祭祀― 連綿と続く天皇の祈り―

展転社 平成二十二年七月 B 6 判 五二頁 本体一二〇〇円

間宮中祭祀一覧・現行国民の祝日と宮中祭祀・歴代天皇陵、 なかった宮中祭祀の内容と現状について解説している。 祭祀について、 まり知られていないものと思われる。本書は著者が「 ことがあるが、今日までの歴史や年中祭祀についてはあ 第六章「皇室祭祀の現状」、第七章「付図」(※「現行年 史」、第二章「宮中三殿と職掌」、第三章「宮中三殿の諸 いるように、従来、専門書以外では触れられることが少 民の皆さんに知られてゐない天皇の御本質、また宮中の 部 本書は七章構成であり、 天皇陛下の御公務のなかで宮中祭祀については、 第四章「皇室の臨時祭祀」、第五章「陵墓と勅祭」、 (即位儀礼や皇族の御誕生・御成婚など)が報道される 興味、関心を抱いて頂くこと」と述べて 第一章「宮中祭祀とその歴 その 祭 国

製・ 日一覧・宮中三殿図・近世の内侍所」)となっている。 御著述から拝する歴代天皇の祈りと御敬神の念につ 章では宮中祭祀 の概略、 一種神器の重要性、 御

> 第二章では、 宮中三殿のあらましとと

可分であり、 祀・式年祭、さらに勅祭社と皇室の関係について述べて 殿の年中祭祀を解説している。 もに掌典職や楽師の職掌、天皇の御装束、 めて学ぶ読者にも読みやすい内容となってい 略化は古儀を護り伝えてゆくうえで深刻な問題といえる ているように、その御日常は不断の「まつりごと」と不 で現在の宮中祭祀の簡略化について疑問を提示している いる。そして第六章では前章までの内容を踏まえたうえ 幸啓を紹介している。 臨時祭として葬礼、即位儀礼、 ついて触れ、第三章では新年の四方拝から始まる宮中三 いて述べている。 本書は全章に亘って平易な文章で書かれており、 著者が本書において天皇の御本質を「祭祀王」と述べ 本書で指摘されている近年の宮中祭祀の簡 第五章では歴代天皇の陵墓と祭 また、第四章では皇室の 御成婚・成年式・海外行 毎朝の御拝に る。 宮中祭 はじ

祀のテキストとして是非目を通しておきたい一冊である。

介

畄

田莊司編

.

紹

『日本神道史』

吉川弘文館 平成二十二年七月 B6判 三四二頁 本体三五〇〇円

日本神道史
同用任何 30

者によるものである。 究者のほか、 るものであり、 世の神道史研究を牽引されている岡田莊司氏の編集にな あった。一 の一冊として刊行された。 最新の成果が盛り込まれている。 平成二十二年は神道史の通史が二冊も刊行された年で 藤森馨・ 冊は、 西岡和彦の諸氏といった中堅で活躍する研 もう一冊が本書である。 加瀬直弥・齊藤智朗両氏という若手の研究 吉川弘文館の 鎌田純一氏の したがって、 執筆は岡田氏をはじめ、 〈テーマ別〉 『神道史概説』 今日の神道史研究の 本書は、 通史シリー 笹生

第 I 道 なっており、 どのようなものかについての理解が得られよう。 本書は、 神社のあり方に迫る」(はじめに)内容となっている。 第Ⅲ 「神道とは 部 第Ⅰ部 一神道の歴史的変容を概観することで、 「神社の分布と神道の現在」 何 「神道とは何か」、 か」によって、 神道の基本的性格が 第Ⅱ部 の三部 「神道の 本論と 諸構成と

> 社の分布と神道の現在」は、 参考文献や年表、 分は、本書の「結論」と言ってよいものであろう。 ている。また神社信仰の過去と現在を鳥瞰して論じた部 私たちの生活に密着した神社信仰の全国的分布を概観し 的な視座から神道の歴史が叙述されている。 史・社会史・異文化交流史・思想史・精神史など、 神道史が概観される。 も言うべき第Ⅱ部 詳細な索引は本書の理解を助ける 「神道の歴史」では、 叙述の視座は一つでなく、 八幡信仰や伊勢信仰 古代から現代の 第Ⅲ 部 神 誏 度

手にとっていただきたい一冊である。されている。神道を理解したい一般の方がたには、

み表現されている」という西田長男の理解が、

出発点」になっている。

また本書は、

般向けに

刊行

本書の

るものでもある神道は、

「その時

マの歴史的事実の

Ĺ

0

、また日本人の心の最も奥深いところに存している神道は政治や文学・芸術などの世俗の歴史のなかに

あ

『神道史概説

神社新報社 平成二十二年十月 A5判 八九七頁 本体五〇〇〇円

生閣、 通じて変らざる神道の本質を探究」してい ぞれの「時代ごとに現われる神道の特性、さらに時代を 第五章「近代」・第六章「現代」に時代を区分し、それ 代」・第二章「上代」・第三章「中世」・第四章「近世」・ 通じて変らざる神道の本質を探究すること」(序)であ 本神祇史』(国晃館、大正二年)、清原貞雄 部の神道史の通史は、戦前に刊行された佐伯有義『大日 というには一、〇〇〇頁近くの大著であり、これだけ大 出版された。斯界待望の書といえよう。しかし、 る鎌田純一氏が、古代より現代に至る神道史の概説書を ると明言する。これは本書全体を貫く基本的な姿勢であ 目的を「時代ごとに現われる神道の特性、さらに時代を 戦後の またモチーフでもある。そして著者は、第一章「古 昭和七年)以来であろう。著者は、《神道史学》の 《神道史学》を牽引されてきた先達の一人であ 『神道史』 本書にお 概説書 (厚

制度と思想の両面を見ていくものである。また各章の註

て、平成の即位の礼・大嘗祭に奉仕された著者の含蓄ある、平成の即位の礼・大嘗祭に奉仕された著者の含蓄ある」(八九二頁)と述べているが、これは宮内庁掌典とし本は現代にも変えられることなく、継承されてきていた。また改められた経験を反映してか、平田篤胤に重神社宮司を務められた経験を反映してか、平田篤胤に重神社宮司を務められた経験を反映してか、平田篤胤に重神社宮司を務められた経験を反映してか、平田篤胤に重神社宮司を務められた経験を反映してか、平田篤胤に重神社宮司を務められた経験を反映してか、平田篤胤に重神社宮司を務められた経験を反映してか、平田篤胤に重神社宮司を務められたところはあると云えようが、その根れ、また改められたところはあると云えようが、その根れ、また改められたところはあると云えようが、その根れ、また改められたところはあると云えようが、その根のいては、「国制の変化などともに、部分変化させられては、「国制の変化などともに、部分変化させられては、「国制の変化などともに、部分変化させられては、「国制の変化などともに、部分変化させらいる。」といる。

ける著者の叙述は、確実な史料に基づく実証的なもので、

る言葉と言えよう。

『神道はどこへいくか』

石井研士編

ぺりかん社 平成二十二年十一月 A5判 二八○頁 本件

化や現状についてまとめた論文十三本で構成される。編化や現状についてまとめた論文十三本で構成される。編別のように捉えられているのだろうか。本書は現代社会とのように捉えられているのだろうか。本書は現代社会とのように捉えられているのだろうか。本書は現代社会とのように捉えられているのだろうか。本書は現代社会とのように捉えられているのだろうか。本書は現代社会とのように捉えられているのだろうか。本書は現代社会とのように捉えられているのだろうか。本書は現代社会とのように捉えられているのだろうか。本書は現代社会とのように表示しているのであり、これらは大きの関係に焦点を表示している。

日本の現代社会において、メディアから得られる情報 日本の現代をまとめている。そして各論を通し、たとえ「流行」であれ、神道に興味を持ってもらうというこえ「流行」であれ、神道に興味を持ってもらうというこえ「流行」であれ、神道に興味を持ってもらうということに関して肯定的である一方、この現象を「希薄な宗教性」であるとし、流行の消失によって急激に終息していく可能性について指摘している。また、神社界のインく可能性について指摘している。また、神社界のインく可能性について指摘している。また、神社界のインく可能性について指摘している。また、神社界のインく可能性に知らるというに表表を通し、たとえている。 現代の事情に照らし合わせた興味深い内容となっている。 日本の現代社会において、メディアから得られる情報

とつの契機として是非一読をお薦めしたい。数少ない。これからの神道に関する課題に向き合う、ひろう大きな問題であるが、実証的な切り口の書籍はまだ

と神道の関係や神社のあり方は、

今後も注目されるであ

アが発信する情報から完全に離れることは難しい。

はなくてはならないものであり、

神社界もまた、

メデ

承とその課題について、またインターネット

ディアと神社との多様な関わりについて、

実例を踏ま

としてきた氏神信仰とは異なるもの」であると指摘して関心」を寄せていることついて、「従来神社神道が基盤神社の関係について注目し、現代人が「急激で一時的な者である石井研士氏は、特にメディアを通した現代人と

いる。各論文は現代社会における伝統的な神道祭祀の継

介 岡崎久彦著

紹

『明治の外交力―陸奥宗光の「蹇蹇録」に学ぶ―』

海竜社 平成二十三年二月 A 5 判 三二九頁

本体一六〇〇円

問題を鋭い洞察力と決断力によって切り抜け、領事裁判 者」といわれるほど、明治外交の代表的人物と言えば陸 奥宗光をおいていないであろう。 す」意味である。筆者が本書の中で「日本外交の創始 之故」に由来、「困難に苦しんで克服する」「忠義を尽く 副 日清戦争勝利後の三国干渉、不平等条約改正等の外交 題に出てくる「蹇蹇」とは易経の 「王臣蹇蹇、 匪 躬

早目の外交措置で、開戦の障碍を除いていった裁量を紹 説 権の撤廃を成功させ、その後小村寿太郎によって関税自 人物であった。 主権を回復するに至る。まさに近代日本の礎を築いた大 第一章では日清戦争を勝利へ導いた陸奥の外交力を解 続く第二章ではロシアによる干渉に対し陸奥の早目

> 揮され、第八章で、「乱麻を断つ」の題の如く陸奥の憂 干渉の中で国家の命運をかけた指導者の識見が見事に発 力で日清戦争の状況を見極めている。第七章では、三 静に観察していった経緯を、 の慨世の気力は最後まで衰えないのである。 第六章では、 透徹した洞察 玉

陸奥であり、その意志を継いだのが原敬、 日本の民主主義は強固な基盤となり、それを築いたのは えなしで来たことは、大正デモクラシーの基礎によって、 うもない状況を何度も迎えながら、クーデーターの噂さ おわりに」で筆者は、 戦後日本の政治が、 西園寺公望だ どうしよ

とが出来る好書である。 乗り切った陸奥の も拘わらず、毅然たる対応が出来ずにいる今の政府に対 厭気がさしている国民は多いのではないか。 中国やロシアによる領海侵犯が多発しているに 『蹇蹇録』 今の外交問題も学ぶこ 国難を

現在、

が述べられ、

第五章では世論に流されず内外の情勢を冷

が伊藤・

陸奥のもとで日清開

戦前夜、

達成される経緯

第三章では開国以来の悲願であった不平等条約の改

『蹇蹇録』に学ぶ

331 紹 介

介

杉原誠四郎著

『新教育基本法の意義と本質』

自由社 平成二十三年五月 A 5 判 三七〇頁 本体二六〇〇円

化」所収)をきっかけに上梓されたもので、教育を研究 する教育学界に対して厳しく批判を浴びせている。 学会紀要四七号に執筆された「教育基本法と教育勅 (明治聖徳記念学会復刊四七号特集「近代日本の教育と伝統文 筆者が「はしがきに」に記しているように、 本書は本

ら抜け出 拘わらず、 幹たる道徳教育が蔑ろにされ、 戦後の日本に於ける教育学界に対し、子供への教育の根 ④制定過程をめぐる論点と課題」で発表されたものを掲載。 連15学会共同公開シンポジウム「教育基本法改正問題を考える 十五年八月二十五日、 載)と第二章「教育基本法の制定過程と教育勅語」 動して―」(前掲復刊四七号特集「近代日本と伝統文化」掲 第一章「教育基本法と教育勅語 [せない 戦前の教育は全て悪かっ でいることを解説 早稲田大学において開催された教育学関 戦後六十年を過ぎたにも -教育学界の動きと連 たかのような前提 (平成 は か

四章は新たに執筆されたもので、 第三章では

教育 のが、 園 育勅語を通して教育の再興を願いたい。 期中等教育での哲学や親学の している。第四章「新教育基本法の逐次解説」では、 し逆に不足するものが新教育基本法には目立つとも指 本的には変わっていない事を主眼とされ れたのであるから、 新教育基本法は旧教育基本法の反省の上に立って制定さ であり、 子供たちへの道徳教育を否定したりすることは本末顚倒 強調され、 育を創造していくのが、教育研究者の本来の役割である 「新教育基本法制定の意義と本質」と題し、 後、 保育所の教師の養成教育における親学、 般における宗教学の学習の欠如等を指摘している 日本の教育研究者はその使命を放棄している事を 教育の あってはならないことであると力説する。 教育基本法の名において国家を否定したり、 頽廃が叫 新教育基本法も、 ば れてから久しい 教育の欠如 旧教育基本法と基 の問題や、 ているが、 が、 普遍 そして教師 本書と教 色的な教 また しか 幼